【研究ノート】

神奈川県立歴史博物館所蔵「阿部家資料」について
―備後福山藩阿部家旧蔵資史料との関係を中心に―

嶋村元宏

【要旨】

これまで、神奈川県立歴史博物館所蔵「阿部家資料」については、その位置づけが明確にされていなかったことから、①当館所蔵「阿部家資料」以外の阿部家伝来品の所蔵・保管先について確認し、②当館所蔵「阿部家資料」の全資料を紹介する。そして、③他機関が所蔵・保管する阿部家伝来品との関係性を視野に入れつつ、個々の資料の来歴を中心に検討し、特に成立年代について考察を加えた。さらに、④阿部正弘の伝記として、また、史料としての価値も高く評価されている、浜野省吾により編まれた『懐旧紀事―阿部伊勢守事蹟』（明治三二年刊）と阿部家伝来品との関係を明らかにする。以上の作業を通して、当館所蔵「阿部家資料」の位置づけについて私論を述べるとともに、この作業によって派生した博物館資料論に関わる課題について指摘した。

【キーワード】

阿部正弘、編纂、資料群、史料批判、博物館資料論

はじめに

《かながわの文化と歴史》を基本テーマとする神奈川県立歴史博物館は、昭和四二年に人文分野と自然分野を併せ持つ総合博物館として開館した前身の神奈川県立博物館時代以来、かながわの歴史のみならず、日本史上においても近代の始まりと位置づけられる開国期に関する資料を収集してきている。その近代史コレクションの中核をなす資料群に「阿部家資料」と称する一群が存在する。これは、嘉永六・七年の二度にわたるペリー来航当時、老中首座にあった阿部正弘の家に伝わった資料の一部である。

のちに詳しく述べるように、これまで「阿部家資料」に含まれる「別段風説書」を始めとする一部の資料は、当館の総合テーマ展示（常設展示）のほか、ペリー来航をテーマとする他機関における特別展・企画展などでも紹介・活用されてきているが、その全貌については、当館で平成九年に開催したコレクション展示「嘉永の嵐――阿部家資料」において、全資料を展示・紹介したのが唯一であった。この展示では、全資料を紹介することを主眼としたものであり、各資料について詳細な調査・考察を加えたうえでおこなったものではなかったことから、資料群としての特質を明らかにするところまでは至っていなかった。また「阿部家資料」の各資料を対象とした学術利用においても、「別段風説書」に集中しており[1]、「別段風説書」以外については、三点の資料紹介があるのみである[2]。

そこで本稿では、以下の作業を通して、現段階における「阿部家資料」の位置づけを確認することを目的としたい。①当館所蔵「阿部家資料」以外の阿部家伝来品の所蔵・保管先について確認し、②当館所蔵「阿部

家資料」の全資料を紹介する。そして、③他機関が所蔵・保管する阿部家伝来品との関係性を視野に入れつつ、個々の資料の来歴を中心に検討し、特に成立年代について考察を加えた。さらに、④阿部正弘の伝記として、また、歴史研究における史料としての価値も高く評価されている、浜野省吾により編まれた『懐旧紀事―阿部伊勢守事蹟』（明治三二年刊）と阿部家伝来品との関係を明らかにする。以上の作業を通して、当館所蔵「阿部家資料」の位置づけについて私論を述べることとする。

なお、最後にこの作業を通じて派生した博物館資料論に関わる問題についても指摘しておきたい。

一　阿部家伝来品の所蔵・保管状況

備後福山藩は、関ヶ原の戦以降、水野勝成の入府によりはじまり、一時天領となるが、松平忠雅の跡を受け、宝永七年から廃藩置県に至るまでの一六一年間を十代にわたり阿部家が治めていた。

当館の「阿部家資料」を含め阿部家に伝来した品々は、現在の東京都文京区西片の福山藩中屋敷（圓山屋敷）があった場所で子孫により大切に保管されていた。歴代藩主が、幕府の要職に就いていたこともあり、多くの伝来品は江戸にあったものがそのまま遺されていたと思われる。[3]

現在では、福山市（歴史資料室）、福山城博物館、福山誠之館同窓会、北海道立文書館、文京区ふるさと歴史館、鎌倉国宝館、神奈川県立歴史博物館で保管されている。

もともと東京にあった阿部家伝来品の多くは、福山市へ寄贈されており、当初寄託資料として受け入れた時点で作成された目録[4]によれば、東京に遺された伝来品のうち、福山藩関係に限った九〇三件が福山へ移されている。[5]その後寄贈されたのち整理が進められ、平成二三年からは資料集として『東京阿部家資料』が発行されている。[6]

また、福山市内には、福山市が設置した福山城博物館において、伝来品のうち、武具甲冑や阿部正弘による扁額などが収蔵されているとともに、藩校誠之館を起源とする広島県立誠之館高等学校の同窓会組織である福山誠之館同窓会には、同窓会創設一〇〇年を記念して、阿部正弘の肖像画として著名な、二世五姓田芳柳による油彩画をはじめ、阿部正弘直筆の書などが、阿部家から寄贈されている。[7]

福山市以外では、廃藩置県以後、伯爵家として圓山屋敷で生活をしていた阿部家に関わる資料が文京ふるさと歴史館で、阿部家伝来のひな人形や調度品などの工芸品は、鎌倉国宝館で保管されている。また、老中在任中蝦夷地問題に関係した正精と正弘時代の蝦夷地関係資料が北海道立文書館に寄託されている。収蔵品は文書史料と地図史料に大別されるが、とくに地図史料については、当時の蝦夷地周辺を稠密に描いた良質な史料である。[8]そして、神奈川県立歴史博物館では、その前身の神奈川県立博物館時代の昭和五一年から五九年にかけて、江戸湾防備や開国期に関わる資料を中心に受け入れている。

以上が、阿部家伝来品の保管先の大略である。

このように、阿部家にあった伝来品が分散して保管されるようになったのは、第一六代ご当主であった阿部正道氏のご意向によるところである。正道氏の父君・正直氏の時に、福山誠之館同窓会へ伝来品の移譲がおこなわれているが、その他は、阿部正道氏の代のことであり、福山市へ当初九〇三件の伝来品が寄託された際も、「福山関係以外の文書は寄託されなかった」[9]り、蝦夷地すなわち北方関係に関わる資料群は、北海道立文書館へ、開国期を主要展示と位置づける神奈川県立博物館へは、開国関係資料[10]を、というように、保管先とゆかりのある内容を持つ資料

を、意図的に移譲していることからも明らかである。

二　阿部家資料の概要

神奈川県立歴史博物館では、現在、四九件の阿部家伝来品を「阿部家資料」として保管している。【表】に従い、個々の資料について、その内容も含め確認しておきたい。【表】は概ね成立年代順に、また内容によるまとまりを考慮して配列してある。

【表】阿部家資料一覧

No.	目録番号	新資料番号	資料名称	作者・発給者・発行者・撮影者	時代	和暦	員数	寸法（タテ×ヨコ）cm
1	7-A1439-1	CU0000902	魯西亜紀略	斎藤正謙	江戸	天保8年	1	27.0×19.2
2	7-A1439-8	CU0000909	奉使日本紀行	青地林宗	江戸	弘化3年	15	23.7×16.7
3	7-A1439-3	CU0000904	夷匪犯境録		江戸末期		5	23.8×17.1
4	7-A1439-4	CU0000905	英国侵犯事略並和解	穎川四郎・鄭幹捕	江戸末期		1	26.1×17.8
5	7-A1439-5	CU0000906	清英戦記	鈴木尚	江戸	嘉永2年	1	23.8×16.7
6	7-A1439-7	CU0000908	阿芙蓉集聞		江戸	弘化4年	5	23.3×16.7
7	7-A1493-16-2	CU0000924	亜米利加船並人物図　大船之方将官（ヴィッドル）		江戸		1	40.6×27.8
8		CU0001801	亜米利加船並人物図　小船之方将官		江戸		1	40.5×27.5
9		CU0001802	亜米利加船並人物図　士官		江戸		1	40.5×27.5
10		CU0001803	亜米利加船並人物図　部屋守		江戸		1	40.5×27.5
11		CU0001804	亜米利加船並人物図　兵卒		江戸		1	40.5×27.5
12	7-A1493-16-1	CU0000923	亜米利加船並人物図　水夫		江戸		1	40.5×27.7
13	7-A1493-16-3	CU0000925	亜米利加船並人物図　北亜墨利加之内バチトン船　コロンバス号		江戸		1	53.5×78.5
14	7-A1493-16-4	CU0000926	亜米利加船並人物図　北亜米利加之内バチトン船　ヴィンセンス号		江戸		1	54.1×68.3
15		CU0001805	亜米利加船並人物図　大筒		江戸		1	54.1×68.3
16		CU0001806	亜米利加船並人物図　小筒		江戸		1	40.5×27.5
17		CU0001807	亜米利加船並人物図　竈		江戸		1	40.5×27.5
18	7-A1493-6	CU0000907	洋外紀略	安積重信	江戸	嘉永1年	3	23.4×16.2
19	7-A1671	CU0001776	海防私策	羽倉簡堂	江戸	嘉永2年	1	22.5×15.5
20	7-A1493-14	CU0000921	英船浦賀来泊一件		江戸	嘉永2年	1	24.3×17.3
21	7-A1510	CU0000230	近海見分之図		江戸	（嘉永4年ヵ）	4	26.4×19.0
22	7-A1493-7	CU0000927	浦賀台場図		江戸		1	40.6×27.8
23	7-A1493-9-1	CU0000910	嘉永三年　別段風説書	司天台訳	江戸	嘉永3年	1	24.3×17.0
24	7-A1493-9-2	CU0000911	嘉永四年　別段風説書	崎陽訳	江戸	嘉永4年	1	24.3×17.1
25	7-A1493-9-5	CU0000914	嘉永五年　別段風説書	司天台訳	江戸	嘉永5年	1	24.0×16.8
26	7-A1493-9-4	CU0000913	咬留巴都督職之者筆記和解・甲必丹差出候封書和解	西吉兵衛・森山栄之助訳	江戸	嘉永5年	1	24.4×17.0
27	7-A1493-9-3	CU0000912	和蘭領東印度総督某贈長崎鎮台書簡和解・和蘭甲必丹答書和解		江戸	嘉永5年	1	24.4×17.0
28	7-A1493-9-6	CU0000915	安政四年　別段風説書	手塚律蔵他訳	江戸	安政5年	1	27.2×19.9
29	7-A1493-9-7	CU0000916	別段風説添書	手塚律蔵他訳	江戸	安政5年	1	27.3×20.3
30		CU0044162	安政四年　別段風説書	手塚律蔵他訳	江戸	安政5年	1	27.2×19.9
31		CU0044163	別段風説添書	手塚律蔵他訳	江戸	安政5年	1	27.3×20.3
32	7-A1493-2	CU0000903	日本風俗備考	杉田成卿	江戸	天保4年	22	25.5×18.0
33	7-A1672	CU0001778	馬蹄鉄進上　図面付	ペルス・ライケン	江戸		5	27.8×39.5、27.8×40.0
34	7-A1673	CU0001779	五稜堡縮図　本形二百分一		江戸		1	55.5×129.5
35	7-A1674	CU0001780	銃眼煩座煩床等図　本形五十分一		江戸		1	98.0×136.0
36	7-A1493-15	CU0000922	亜米利加船来舶図		江戸		1	52.2×113.3
37	7-A1493-11	CU0000918	癸丑六月亜船渡来一件		江戸	嘉永	1	24.5×17.2
38	7-A1493-10	CU0000917	諸家上書写		江戸	嘉永6年	1	13.9×20.4
39	7-A1670	CU0001775	海防不行届之件		江戸		1	24.5×16.5
40	7-A1493-18	CU0000928	下田之図		江戸		1	114.0×159.0
41	7-A1493-12	CU0000919	異国船対馬来航一件		江戸末期		1	16.1×153.2
42	7-A1493-19	CU0000929	横浜来信		江戸		1	24.4×33.7
43	7-A1676	CU0001782	真政大意	加藤弘之	明治		2	23.0×16.0
44	7-A1677	CU0001783	西国立志編	サミエル・スマイル著、中村正直編訳	明治		11	22.0×15.3
45	7-A1493-21	CU0000931	交易通史		明治		4	22.4×15.2
46	7-A1493-22	CU0000932	佐賀征討戦記		明治前期		1	22.9×15.3
47	7-A1493-20	CU0000930	絵新聞日本地		明治		1	22.5×15.4
48	7-A1675	CU0001781	文明論之概略	福沢諭吉	明治		6	22.8×15.9
49	7-A1493-13	CU0000920	梅堂浅野長祚君行状		江戸末期		1	24.5×16.5

※「No.」は後掲の「図版編」の図番号に対応する。
※記載事項は、現在の登録データによる。

まず、《魯西亜紀略》（№1）と《奉使日本紀行》（№2）とは、いずれもロシアに関する内容を持ち、原書からの写しである。原書の内容は、前者は、天保八年津藩の朱子学者斎藤正謙（拙堂）によって著されたロシアの地誌であり、後者は、ロシア海軍クルーゼンシュテルンが一八〇三年から三年間にわたっておこなった世界周遊探検記を、弘化三年に青地林宗がシーボルトの蔵書を借用のうえ翻訳したものである。筆跡は、いずれも同じであり、アメリカよりも早く日本へ通商を求め来航したロシアに関する文献を写したものであった。いうまでもなく、ロシアへの関心を持っていたことを示す資料である。

《夷匪犯境録》（№3）、《英国侵犯事略並和解》（№4）、《清英戦記》（№5）、《阿芙蓉集聞》（№6）の四件は、いずれもアヘン戦争に関する原書からの写本である。前件同様、いずれも筆跡は同じである。

アヘン戦争直後、中国の敗戦に揺れる日本に対し、アメリカ合衆国政府は、日本が通商を開始する意思があるか否かを確認させるべく、東インド艦隊司令長官ジェームズ・ビッドルを派遣した。そのビッドルを始めとした人物や旗艦コロンバス号とヴィンセンス号の全景並びに、船内にあった大砲や窯などを描いたのが、№7から№17である。薄紙に彩色されており、オリジナルの絵が存在し、それを下敷きに描いた可能性がある[11]。

《洋外紀略》（№18）並びに、《海防私策》（№19）は海防について論じており、《英船浦賀来泊一件》（№20）は嘉永二年に浦賀・下田に来航し測量などをおこなって幕府を刺激したイギリス軍艦マリナー号来航事件の経過をまとめたものである。

№21の《近海見分之図》は、嘉永三年に海防掛を兼ねていた勘定奉行石河政平などが、老中阿部正弘の命により相州、豆州、房州の防備態勢を巡見した際に作成された報告図としての性格を持つ冊子であり、その《近海見分之図》との関係は定かではないが、浦賀周辺を俯瞰して描いた《浦賀台場図》（№22）が含まれている。

№23から№31は、アヘン戦争後、これまでの《風説書》とともにオランダから提出されるようになった嘉永三年から嘉永五年並びに、安政四年の《別段風説書》、および嘉永五年に《別段風説書》とともに提出されたオランダ・ジャワ総督などからの書簡を含む、開国を勧める書類の写しである。嘉永三年から嘉永五年までの《別段風説書》およびジャワ総督などからの書簡類の筆跡は、これまで見てきた写本と同一であるが、安政四年のみ別の人物によるものである。

さらにオランダから輸入された洋書類を翻訳したものの写しに、《日本風俗備考》（№32）、《馬蹄鉄進上　図面付》（№33）、《五稜堡縮図　本形二百分一》（№34）、《銃眼煩座煩床等図　本形五十分一》（№35）、がある。

正弘老中在任時の一大事件となったペリー来航に関する資料としては、ペリー第一回来航時の状況を描いた《亜米利加船来舶図》（№36）、同じく嘉永六年に浦賀に来航した際のペリー艦隊の動静を綴った《癸丑六月亜船渡来一件》（№37）、嘉永七年に久里浜で受領したアメリカ大統領国書に対する大名からの意見の一部をまとめた《諸家上書写》（№38）、アメリカと条約を締結したことに対する責任をとり、老中辞職を願い出た《海防不行届之件》（№39）に加え、開港直後の下田港を俯瞰的に描いた《下田之図》（№40）がある。

№41から№48までは、阿部正弘が死去して以降の事件を扱っていたり、明治時代になってから発行されたりした刊本である。

《異国船対馬来航一件》（№41）は、文久元年のロシア軍艦による対馬

占拠事件について記述したものであり、《横浜来信》（№42）は、関門海峡において長州藩が攘夷目的で外国船を砲撃した下関事件に関して横浜で収集した情報の綴りである。

《真政大意》（№43）は、法学者加藤弘之が、西洋文明の中核は議会制度にあることを論じたもので、サミュエル・スマイルズが著した自助論（Self Help）を中村直正が明治四年に編訳したのが《西国立志編》（№44）である。西洋における貿易の変遷を扱った《交易通史》（№45）、佐賀の乱を記録した《佐賀征討戦記》（№46）、仮名垣魯文、河鍋暁斎ら日本人によって初めて創刊された漫画雑誌《絵新聞日本地》（№47）と福澤諭吉《文明論之概略》（№48）も、「阿部家資料」に含まれている。

なお、内容的に分類が困難であった資料に、《梅堂浅野長祚君行状》（№49）がある。原稿用紙に写されていることから、江戸時代に成立したとは考えづらく、以下で検討することにしたい。

以上、全四九件の内容について確認した。№1から№40および№49は、阿部正弘が生きている時代の内容を持つものであったが、№41から№48までの八件については、明らかに正弘の死後成立したものであった。

三　資料の来歴

次に、繰り返し述べてきた①筆跡と、②資料に付された朱書きによる分類記号、③資料に押された印判に注目し、個々の資料の来歴について検討していきたい。

まず、筆跡である。

絵図類と明治期の版本を除く資料の中で、《魯西亜紀略》、《夷匪犯境録》、《英国侵犯事略並和解》、《阿芙蓉集聞》、《清英戦記》、ならびに嘉永三年から嘉永五年までの《別段風説書》と嘉永五年にオランダから《別段風説書》と嘉永五年にオランダから提出された《嘉永五年　咬噌吧都督職之者筆記和解・甲必丹差出候封書和解》と《和蘭領東印度総督某贈長崎鎮台書簡和解・和蘭甲必丹答書和解》の筆跡は、他の写本と較べ、独特の筆跡であることはすでに確認したとおりである。この独特な筆跡の持ち主については、すでに西村直城によって、福山藩儒石川和助（関藤藤陰）であることが明らかにされている。[12]

石川和助は、文化四年医師関藤政信の四男として備中国吉浜（現在の岡山県笠岡市）に生まれたが、早くに両親が死去したため、文化九年に医師石川順介の養子となり石川姓を名乗るようになった。そして、文政一一年には、京都に出て頼山陽の門人となり儒学を学んでいる。天保三年の山陽臨終の際は、山陽が手がけていた『日本政記』の原稿を託されるほど、厚い信頼が寄せられていた。

その後、天保一四年に福山藩儒の職を得て福山にあった和助は、その年に福山藩主阿部正弘が老中に就任すると、翌弘化元年には江戸へ呼ばれ、正弘の君側御用掛（側用人）となる。まず命じられたのは、当時隠居の身であった徳川斉昭を幕政へ復帰させるべく周旋することであった。そして、ペリー来航に際しては、浦賀や下田へ直接赴き、ペリー艦隊の動向を探索している。さらに、安政三年には、途中正弘の死去にともない途上帰府することになる蝦夷地探索を行うなど、阿部の命を受け周旋や情報収集など多岐にわたる活動に従事した人物である。[13]

そのような経歴を持つ石川和助が、海防、対外政策に関する文献や《別段風説書》のような海外情報を筆写することは何ら不自然なことではあるまい。「阿部家資料」に含まれる海外に関わる文献や情報書は、正弘の側用人として活動していた石川和助によって写された資料であると確定して問題ないであろう。

次に、多くの資料に付された朱書きによる分類記号について、検討しておきたい。

たとえば、№23から№27までの《別段風説書》と《嘉永五年　咬噌吧都督職之者筆記和解・甲必丹差出候封書和解》並びに《和蘭領東印度総督某贈長崎鎮台書簡和解・和蘭甲必丹答書和解》には、「百十五」という共通の番号が付されており、《別段風説書》のうち嘉永三年版には「邊（へ）」、嘉永四年版には「登（と）」、嘉永五年版には「奴（ぬ）」、《和蘭領東印度総督某贈長崎鎮台書簡和解・和蘭甲必丹答書和解》には「遠（を）」が見える。「いろは」が付されているかのようである。

嘉永元年から嘉永五年までの《別段風説書》は、オランダ語原本を長崎で訳した「崎陽訳」と江戸の浅草にあった天文方で訳した「司天台訳」（「江戸訳」）の二種類の翻訳があることが知られている[14]。したがって、嘉永元年から嘉永五年の《別段風説書》は、一〇点存在することとなり、仮に、嘉永元年の崎陽訳を「以（い）」として、いろはを振ると、次のように振られていたと考えることができる。

い……嘉永元年　別段風説書　崎陽訳
ろ……嘉永元年　別段風説書　司天台訳
は……嘉永二年　別段風説書　崎陽訳
に……嘉永二年　別段風説書　司天台訳
ほ……嘉永三年　別段風説書　崎陽訳
へ……嘉永三年　別段風説書　司天台訳
と……嘉永四年　別段風説書　崎陽訳
ち……嘉永四年　別段風説書　司天台訳
り……嘉永五年　別段風説書　崎陽訳
ぬ……嘉永五年　別段風説書　司天台訳

すなわち、現在確認できる嘉永三年の司天台訳、嘉永四年の崎陽訳、嘉永五年の司天台訳に振られているものとも一致していることからもわかるように、阿部家には、現在神奈川県立歴史博物館所蔵する「阿部家資料」に含まれなかった、嘉永元年の崎陽訳と司天台訳、嘉永二年の崎陽訳と司天台訳、嘉永三年の崎陽訳、嘉永四年の司天台訳、嘉永五年の崎陽訳も存在していたことが類推されるのである。また、その流れでいくと、嘉永五年の司天台訳が「奴（ぬ）」で同時期に出された《和蘭領東印度総督某贈長崎鎮台書簡和解・和蘭甲必丹答書和解》が「遠（を）」であることから、両者とともに提出された《嘉永五年　咬噌吧都督職之者筆記和解・甲必丹差出候封書和解》は、虫損により判別できないが、「留（る）」であると考えられよう。つまり、嘉永元年から嘉永五年までにオランダから提供された一〇冊の《別段風説書》とジャワ総督からの書簡類二冊は「百十五」として分類されていたのである。

しかしながら、このほかの資料にはこれほどまでに明確な分類を示すものは存在しない。《奉使日本紀行》（№2）には「ワノ一」と朱書きされた貼り紙が、《癸丑六月亜船渡来一件》（№37）には、「別百三」と見えるが、他に連続するようなものがないため、全体をどのような分類記号で示していたかを理解することは、当館が所蔵する「阿部家資料」だけでは困難といわざるを得ない。いつ整理されたときに付されたかということも含め、現時点では不明である。

最後に、一部の資料、特に絵画資料に捺されている所蔵を示す印判について見ておきたい。「阿部家資料」中の資料には、「福山文庫」と「阿部氏圓山書庫之印」の二種類が確認できる。前者は、《亜米利加船並人

物図》の各図、《海防私策》、《浦賀台場図》、《亜米利加船来泊図》に捺されており、後者の印は、《真政大意》に捺されている。この朱印に見える「圓山書庫」とは当然旧福山藩中屋敷、すなわち圓山屋敷にあったことを示すものとみて間違いはないであろう。ただしこの朱印が江戸時代中に捺されたものであると断定することもできない。整理の過程で捺されたとは考えられるが、分類記号同様、いつの段階であるかは判然としない。

四　『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』の編纂と阿部家伝来資料

最後に、四九件の資料のうち、罫紙を使用している《海防不行届之件》と原稿用紙に写された《梅堂浅野長祚君行状》に注目してみたい。

まず、《海防不行届之件》であるが、「圓山阿部」の罫紙に、

嘉永七年寅年四月十日
極密もの
海防御備充実ニ相成不申御掛り
之場所ニテ恐入思召御登　城不被　遊
候処和泉守様より被召呼罷出候一件
斎藤控

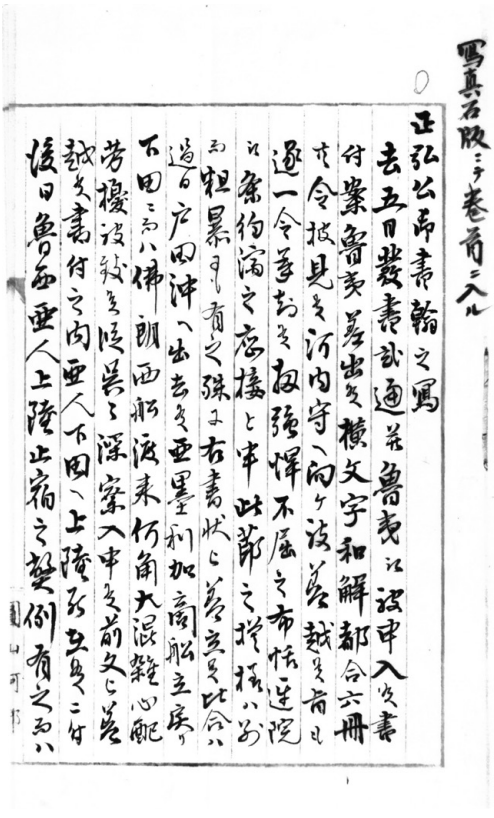
とある。

嘉永七年三月三日にアメリカとの間に幕府は条約を締結することとなるが、その責任を取って老中阿部正弘は四月一〇日に、登城せず辞意を表明するのであるが、その経緯についての記述である。おそらく、『懐旧紀事』を編むために、関係する記録類を薄い橙色で「圓山阿部」と印刷された罫紙へ写し取ったと考えられる。事実、阿部正弘の伝記として史料的にも価値の高い『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』の「引用書目」欄には、阿部の側近であった関藤藤陰とともに、「斎藤貞兵衛筆記」との記載がみえる。(15)「斎藤」とはこの斎藤貞兵衛であろう。

『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』編纂のための記録を写し取るために使われた「圓山阿部」の罫紙に書かれたものは、「阿部家資料」中にはこの一件しかない。しかし、福山市が所蔵する「東京阿部家文書」の中に、同じ罫紙を使った資料を確認することができる。余白に、朱で「写真石版ニテ巻首ニ入ル」と書き込みのある資料【写真】である。これは、浜野省吾によって編纂された『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』の編纂に関係した資料群のなかに含まれているものである。(16)事実、『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』の巻頭には、この「写真石版ニテ巻首ニ入ル」とある資料に書き写された阿部正弘の書簡の写真が掲載されている。(17)

したがって、「阿部家資料」中の《海防不行届之件》も、『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』を編纂するために収集された写本資料ということになろう。

一方、《浅野長祚君行状》も同じことがいえる。



【写真】「懐旧紀事編纂資料」福山市歴史資料室蔵
左下部に「圓山阿部」と見える

表紙に、「梅堂浅野長祚君行状　甲号」とあり、付記するかのように、「原本文字誤謬多シ／其侭ヲ謄写セシム」とあり、別本を書き写したことが示されている。その別本も「誤謬」が多いことから、原本ではなく、写本であったと考えられる。その誤謬の多い写本を再度原稿用紙に写し直したのである。

『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』中、嘉永五年壬子の条の閏二月十日の記事に、当時浦賀奉行であった浅野長祚を京都町奉行へ転任させたことが記されている。そして続けて「蓋近来異国船縷渡来スルヲ以テ或ハ朝廷幕府ノ間事情通セス齟齬睽離ノ生セン〔ヲ〕恐レ長祚ヲ選テ京都ニ遣ハシ其間ニ周旋スル所アラシメンカ為メナリ」と叙述し[18]、その典拠として、

参照

浅野長祚行状ニ曰ク当時浦賀ノ守備甚薄弱ニシテ巨砲ノ弾丸僅ニ十六合薬之ニ称フ又銭糧ノ貯蓄ナシ異船来ル毎ニ其費用悉ク土地ノ商売ニ借ル長祚之ヲ憂ヘテ縷請フ勘定奉行ト論弁シ漸ク御囲米御備金出来シ弾薬モ亦請フ所ノ如ク年々隊吏ノ演武ニ用ル外別ニ儲蓄ノ資アルニ至レリ職ニ在ル〔六〕年、嘉永五年壬子閏二月転任ヲ命セラル[19]、

と、《浅野長祚君行状》を引用しているのである。阿部家資料に含まれるこの資料は、『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』の原稿であることを端的に示しているといえよう。

もちろん、日本における原稿用紙の使用については、江戸時代においても、頼山陽の『日本外史』や塙保己一の『群書類従』が、枡目をもつ原稿用紙を使用した例としてあるが、原稿用紙の使用が一般に普及するのは明治時代中期であることをあわせて考えれば、この資料が江戸時代に写されたものではなく、明治時代に成立したとするほうが自然である。つまり、阿部家資料に含まれる罫紙あるいは原稿用紙が用いられている資料は、『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』編纂のために、明治時代に原本から写されて収集された資料であると考えざるを得ない。

おわりに

神奈川県立歴史博物館が所蔵する「阿部家資料」について、とくにその来歴を中心に検討を加えてきた。その結果、「阿部家資料」には、以下の資料が混在していることが判明した。

すなわち、①老中就任時点から喫緊の課題であった対外問題に関する文献や海外情報書を、その時点において福山藩儒者で、側用人として阿部正弘の命により情報収集活動をおこなった石川和助が筆写により収集した資料のみならず、②『懐旧紀事』編纂過程で編者の濱野省吾などによって収集された資料、③阿部家に仕えていた者たちが所持しており、『懐旧紀事』編纂時に提供された資料、そして④『懐旧紀事』の原稿である。

以上の結果に加え、最後に、本稿でおこなった作業を通して派生した課題について指摘しておきたい。

まず、今回検討の対象とした「阿部家資料」に限らず、原本と後日複写された写本とが混在して一つの資料群として成立しているものがあるということに留意する必要がある。内容的に当時のことを伝えているとはいえ、後日成立した資料の取扱については、博物館では慎重を期す必要があるのではなかろうか。

歴史研究に用いる「史料」であるならば、成立が当時からしばらく時間を経た時期であったとしても、史料批判を受けたうえで、内容的にオリジナルと齟齬を生じていないならば、それらを利用することは特段問

題にはならないであろう。江戸時代に成立した原本をコピーした複写物やデジタルカメラ撮影による電子画像を利用して、歴史研究をおこなうことは一般的である。しかし、そこに記述されたり、描画されたりした内容のみにとどまらず、個々のモノそのものの価値の位置づけをおこなう博物館等の施設においては、外形や内容がまったく同じであったとしても、それらがいつ、誰によって制作されたか、誰が使っていたものなのか、誰が所持していたものなのかといった個々の資料が持つ属性の違いにも、十分目を向ける必要がある。

たとえば、斎藤拙堂によって著された《魯西亜紀略》についてみれば、天保八年に版行された原本を「斎藤拙堂著《魯西亜紀略》天保八年刊」とすることは、当然のことであり何ら問題はないが、「阿部家資料」に含まれる《魯西亜紀略》は、天保八年の版本ではなく、天保八年以降石川和助によって筆写されたものであるから、正確には制作者は石川和助であり、成立年は天保八年以降としなければならない。斎藤拙堂の《魯西亜紀略》として、目録に記載したり展示したりすることは、この資料を正しく紹介していることにはならない。実際の制作者や成立年を示すべきである。したがって、同様に《海防不行届之件》についても、作者不詳、成立年代は「明治時代中期」とするべきであろう。

個々の資料のもつ属性に目を向けることの重要性をあらためて認識したうえで、資料に対峙することが重要であろう。この視角は、博物館資料論における問題として、今後の課題としたい。

註

（1）神奈川県立歴史博物館時代も含め、「阿部家資料」中の「別段風説書」に関する主たる研究成果は、金井圓「嘉永5（1852）年の和蘭別段風説書について」（『日蘭学会会誌』一三巻二号）、松方冬子『別段風説書が語る19世紀―翻訳と研究』（東京大学出版会、二〇一二年）を始めとする一連の業績、ならびに、嶋村元宏「〈史料紹介〉阿部家旧蔵『別段風説書』について―ペリー来航前夜の世界情勢―」（『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第二一号）がある。なお、はじめて「別段風説書」そのものを対象とした安岡昭男は、阿部家で所蔵していた時代に調査を行い、その成果を「和蘭別段風説書とその内容」（『法政大学文学部紀要』一六号）としてまとめている。

（2）阿部正道「近海見分之図」について――幕末の江戸近海の海防――」（『三浦古文化』第五号）、岩壁義光「阿部家資料「馬蹄鉄進上」について」（『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第一七号）、國雄行「阿部正弘旧蔵本『英国侵犯事略並和解』について」（『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第一八号）。

（3）文久二年に阿部正外が広島を経て福山へ移っているが、その後廃藩置県により阿部正桓が東京へ戻っており、江戸と福山とを往復したものもあったと思われるが、具体的にどの品であるかは判然としない。

（4）『東京阿部家文書目録』（福山市教育委員会、二〇〇九年）。なお、福山市へ移されるまでに、東京においてご所蔵者であった阿部正道氏によって生前に整理されており、本目録における資料番号は、阿部正道氏によって振られていた収蔵番号を「阿部家番号」として利用している。

（5）同前、「ごあいさつ」・「凡例」（いずれもノンブルなし）。

（6）二〇一八年三月までに、文書編が（一）～（八）までと工芸編が発行されている。

（7）福山誠之館同窓会所蔵資料については、同HP（http://wp1.fuchu.jp/~sei-dou/）（二〇一八年一二月二七日閲覧）参照。

（8）北海道立文書館HP（http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/mnj/d/guide/b/a/abeke.htm）（二〇一八年一二月二七日閲覧）。によれば、寛政二年から明治五年

までの原資料一三四点、複製のみの資料一七点が寄託されており、「阿部家文書」として収蔵・公開されている。また、地図史料を始め、文書資料の一部はデジタル・アーカイブとしてＷＥＢ上で閲覧することが可能である。

(9) 前掲、『東京阿部家文書目録』「凡例」。

(10) 阿部正道氏は、神奈川県立鎌倉高等学校教員を経て、神奈川県立博物館設立準備室へ移り、開館後も学芸員として在職し、定年を迎えられている。神奈川県立博物館との結びつきが強かったことも、伝来品を移譲する要因の一つであったと考えられる。

(11) これらの絵は、様々なルートで伝写され、一枚物のみならず、冊子本や巻子本にも含まれていることが確認できる。しかしながら、阿部家資料に含まれるような大型の絵は、「弘化三年相州野比沖渡来軍艦並人物図」（川越市博物館所蔵）のほか知られていない。この資料は、コロンバス号、ヴィンセンス号、ビッドルを始めとする人物図の三枚の絵からなり、一九〇八年一〇月一八日から二四日にかけて、横浜開港から五〇年を記念して来航したアメリカ軍艦の入港記念スタンプが押されている（『ペリー来航一五〇年記念　黒船』神奈川県立歴史博物館、二〇〇三年、一〇三頁）。

(12) 西村直城による資料解説（『阿部正弘と日米和親条約』広島県立歴史博物館展示図録、第三一冊、二〇〇四年）五七頁。

(13) 石川和助は、阿部正弘の死後も歴代藩主に仕えている。安政五年には、藩主阿部正教の侍講となり、正教亡き後の文久二年には正外に従い広島へ、そして慶応二年に福山へ移っている。明治元年に阿部正桓の執政となり、明治四年の廃藩置県により正桓が東京へ移ると、翌年には正桓の命により東京へ移り、死去する前年に当たる明治八年まで家政として圓山で生活をしている。

(14) 安岡昭男「和蘭別段風説書について」（『蘭研資料研究会　研究報告』第三〇六号）六頁。なお、《別段風説書》全体については、風説所研究会編『オランダ別段風説書集成』（「青山学院大学総合研究叢書」吉川弘文館、二〇一九年三月）を参照のこと。また、朱書きの意図については、嶋村元宏「《別段風説書》はいかに参照されたか――神奈川県立歴史博物館所蔵「阿部家資料」を事例として――」（前掲、『オランダ別段風説書集成』所収）で明らかにしており、本稿ではその一部を敷衍している。

(15) 浜野省吾『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』（吉川半七、明治三二年）、「引用書目」三頁。

(16) 「懐旧紀事編纂資料」（『東京阿部家文書』阿部家資料番号一五六）福山市所蔵。

(17) 前掲、『懐旧紀事　阿部伊勢守事蹟』巻頭口絵。

(18) 同前、二九五頁。なお、適宜句読点を補った。以下同じ。

(19) 同前、二九五―二九六頁。

【付記】

本稿は、科学研究費助成事業「ペリー来航関係画像資料の史料批判的研究」（ＪＳＰＳ科研費ＪＰ１８５２０４８４）の成果の一部をもとにしている。当該研究では、ペリー来航に関わる画像資料を主たる対象とし、来歴を中心とした史料批判をおこなっていく中で、後年に原本からの伝写によって成立した画像であるにもかかわらず、所蔵先においてはペリーが来航した嘉永六年あるいは嘉永七年を制作年として整理・保管されている資料が多数存在することを確認した。本稿は、そこで用いた研究手法を、資料群の成立過程を把握するために援用したものである。

本稿で掲載した画像の撮影・整理に当たり、当館学芸部中村茉貴氏の協力を得た。記して謝意を表したい。

図版編

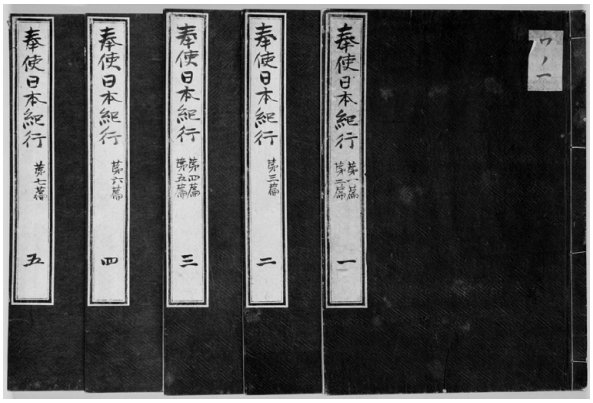


図２

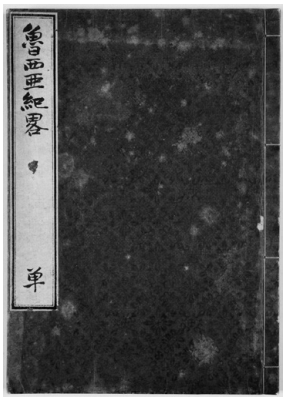


図１

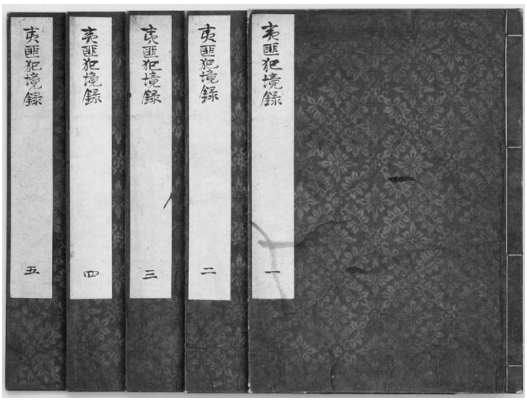


図３

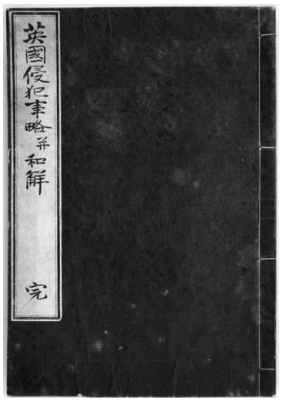


図４

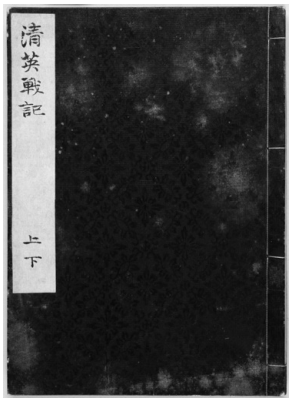


図５

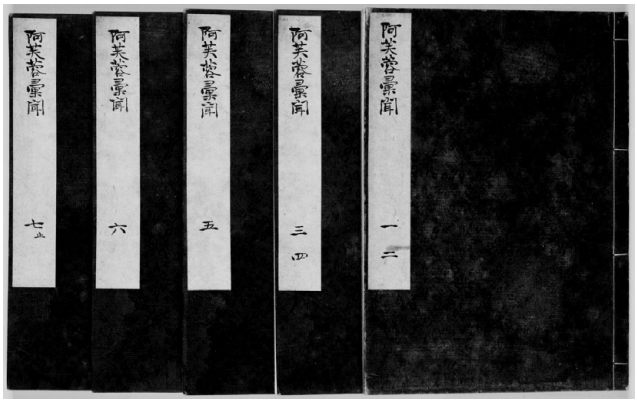


図６

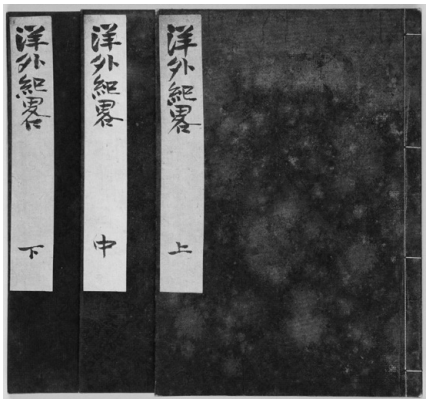


図１８

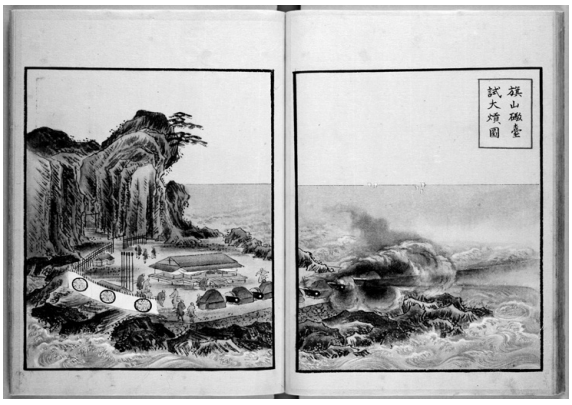


図２１

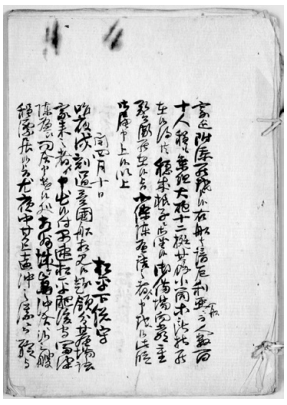


図２０

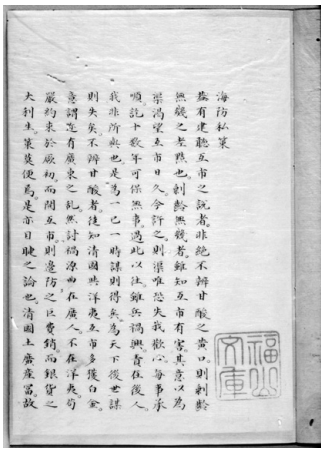


図１９

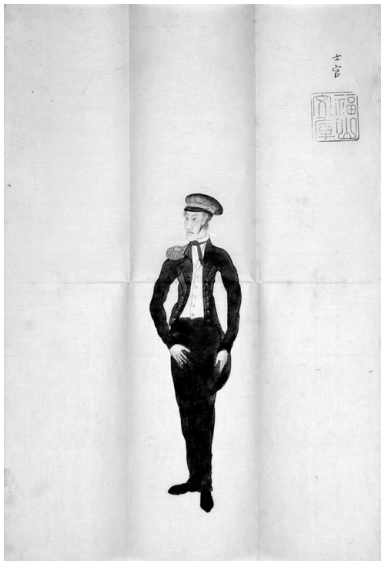


図９

図８

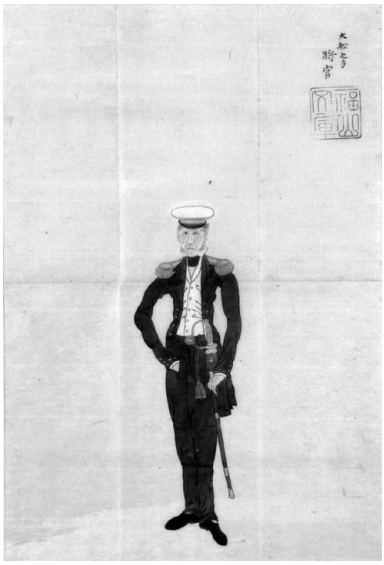


図７

図１２

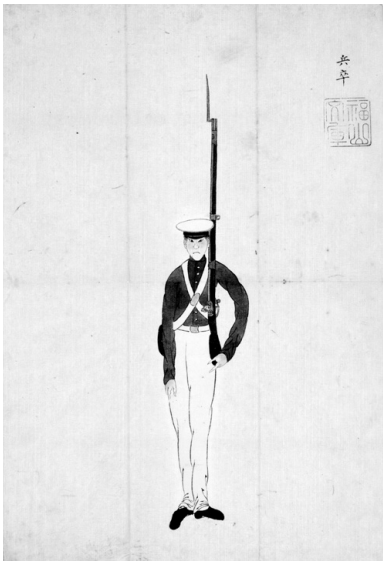


図１１

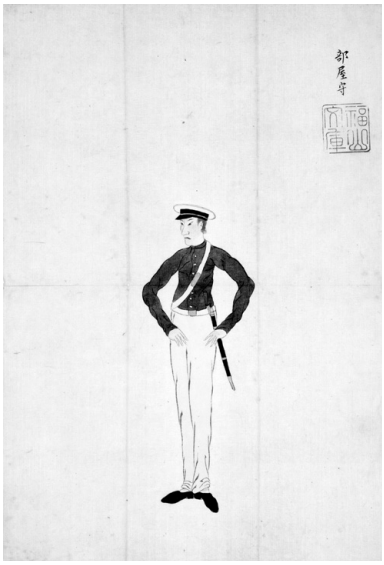


図１０

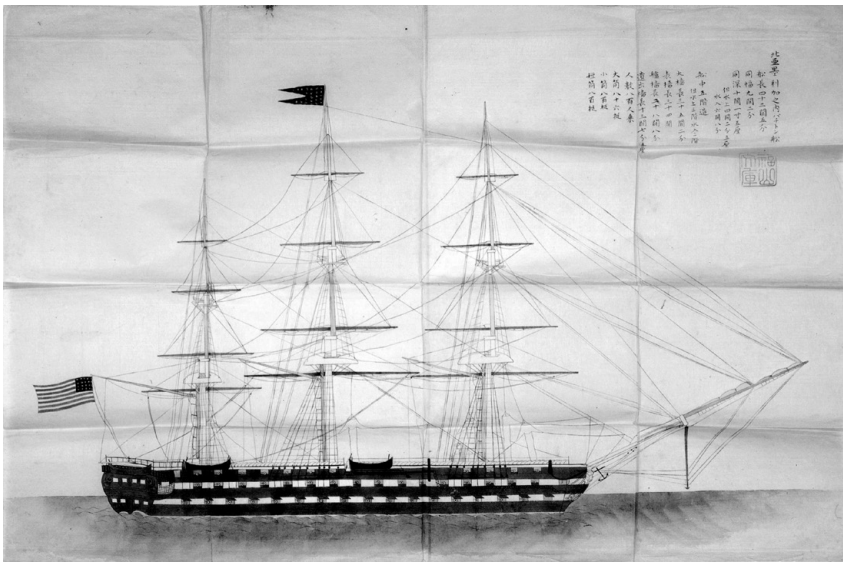


図１３

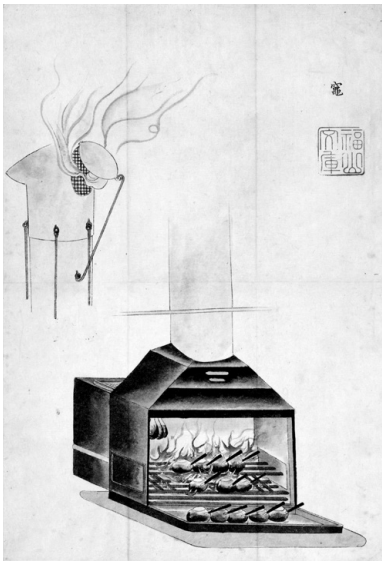


図 17

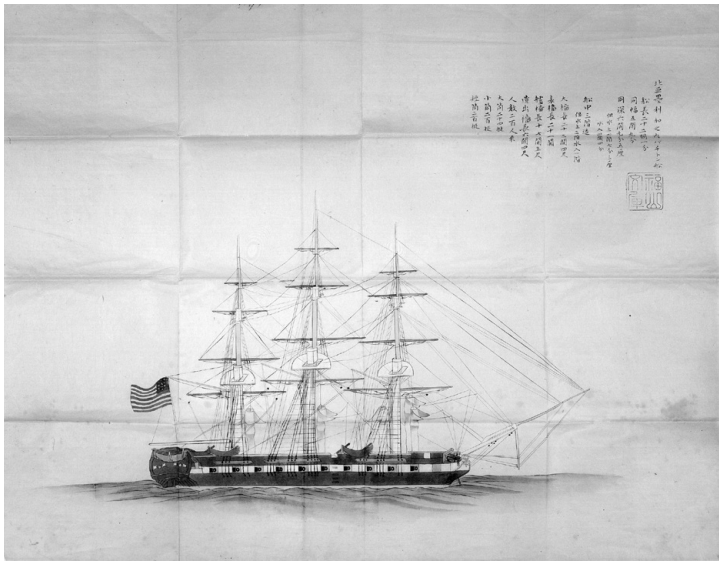


図 14

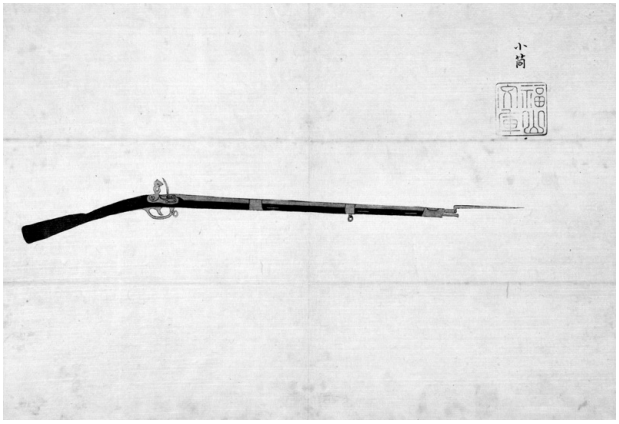


図 16

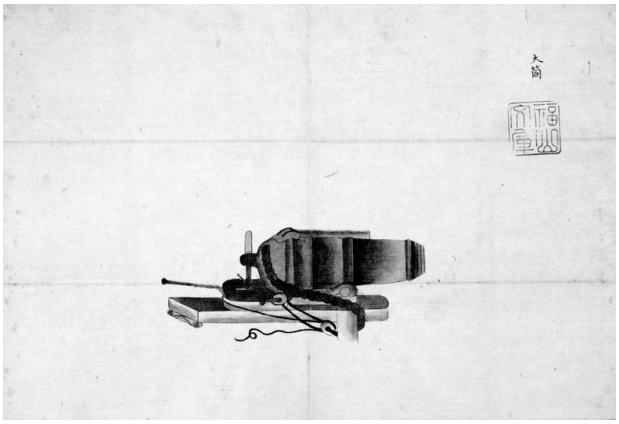


図 15

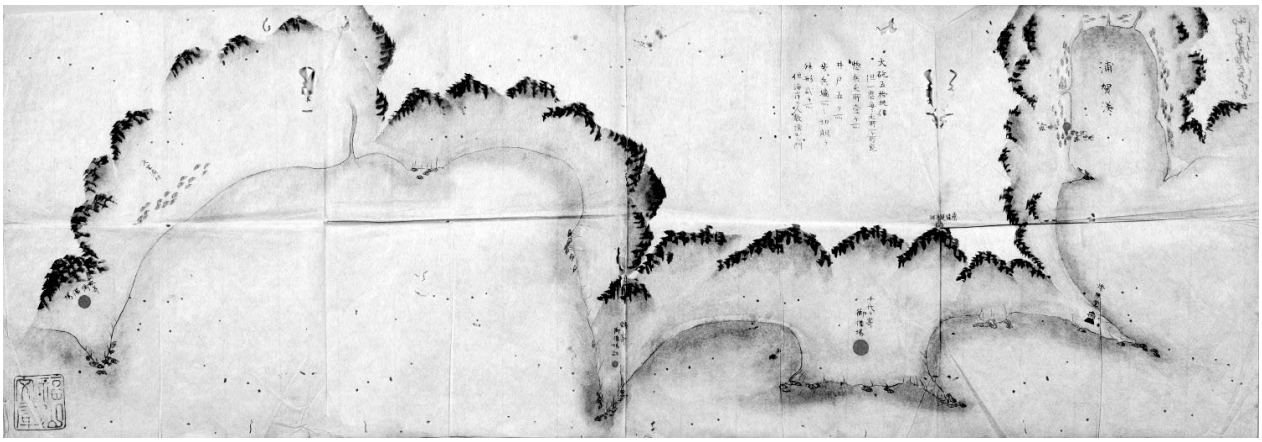


図 22

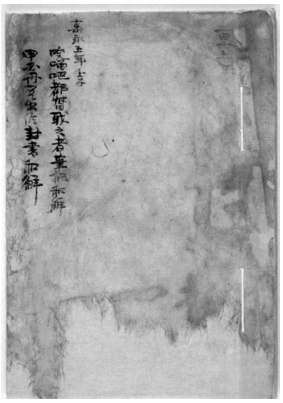


図 26

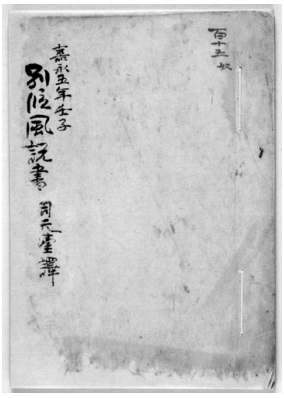


図 25

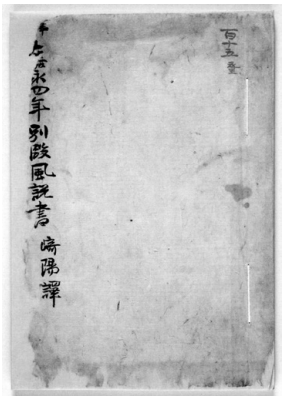


図 24

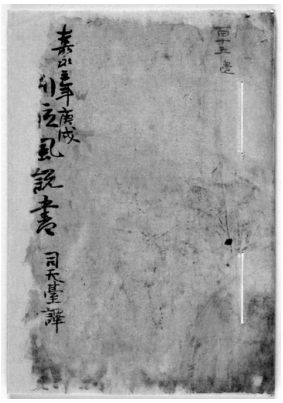


図 23

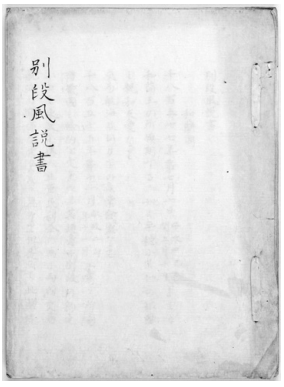


図 30

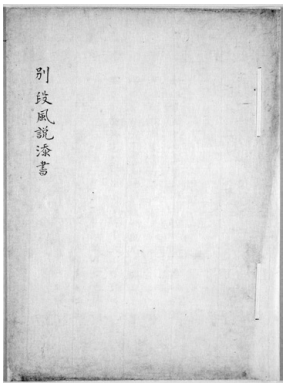


図 29

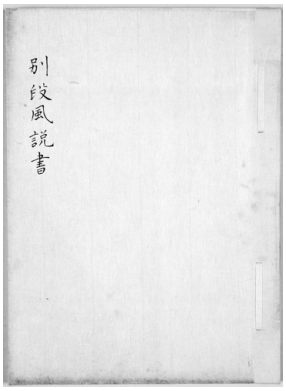


図 28

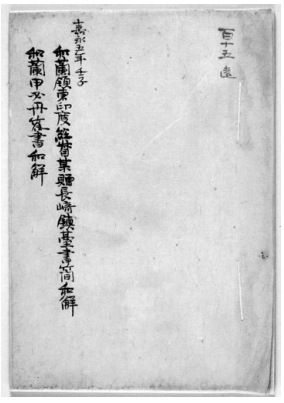


図 27

図 32

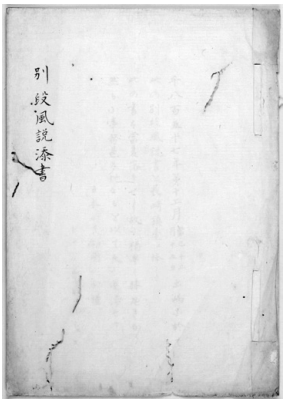


図 31

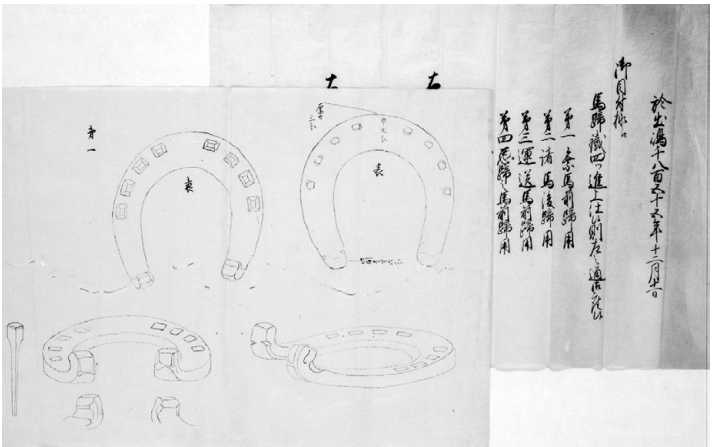


図 33

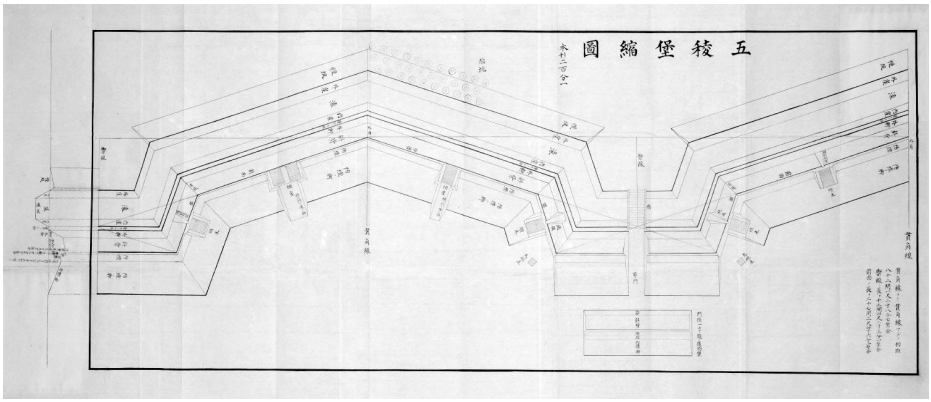


図 34

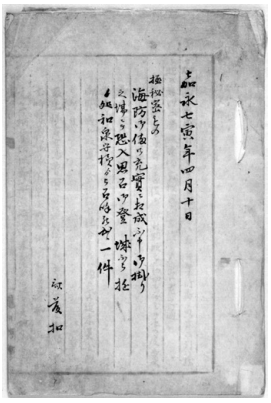


図 39

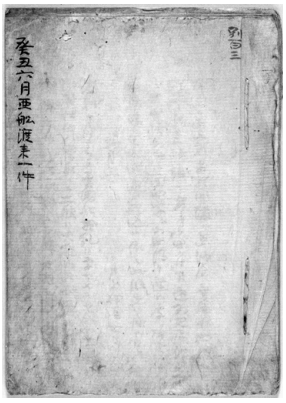


図 37

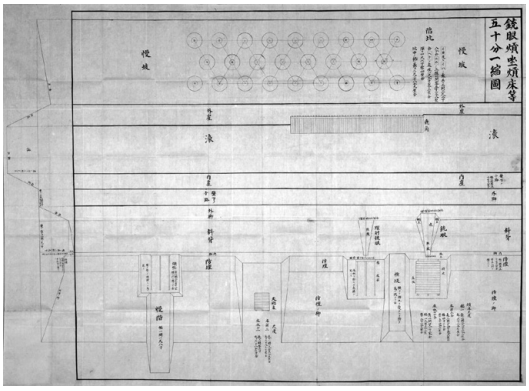


図 35

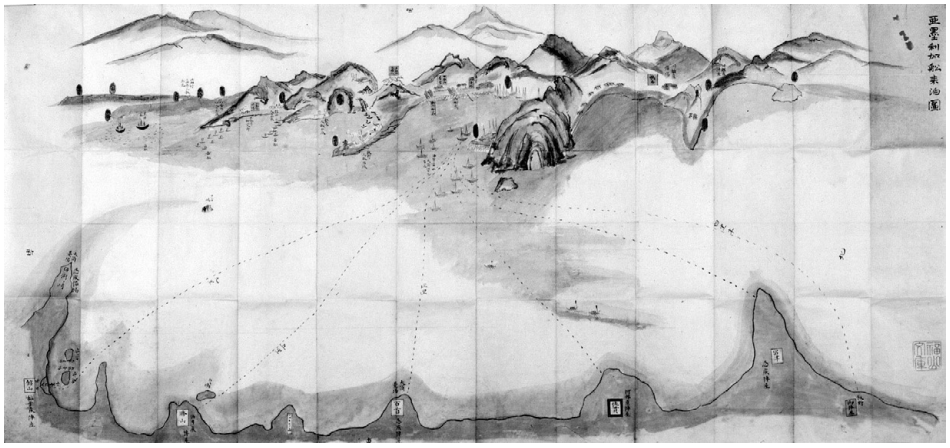


図 36

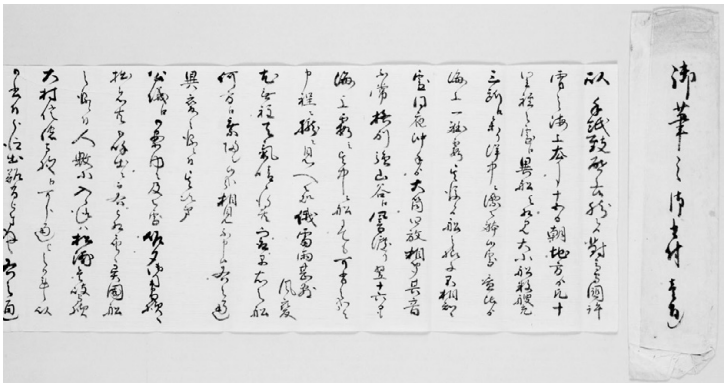


図 41

図 38

図 42

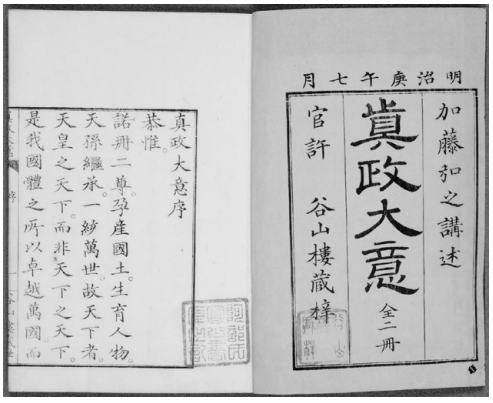


図 43

図 40

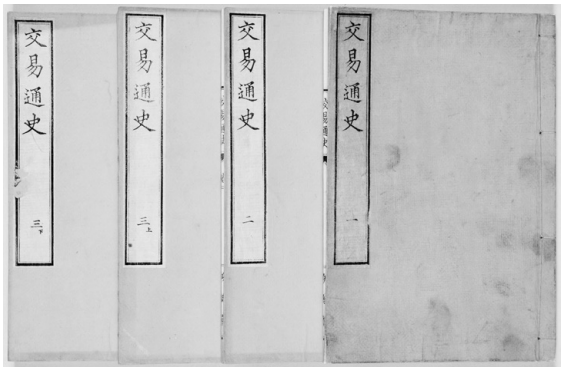


図 45

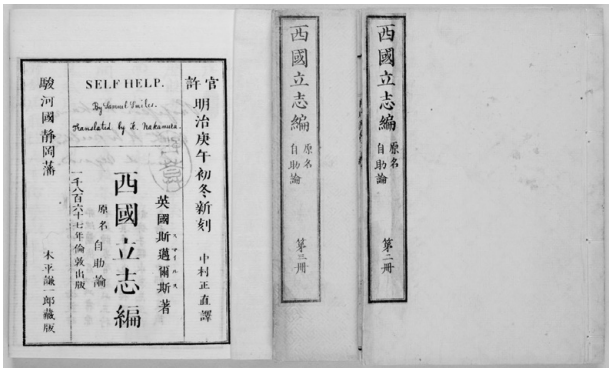


図 44

図 49

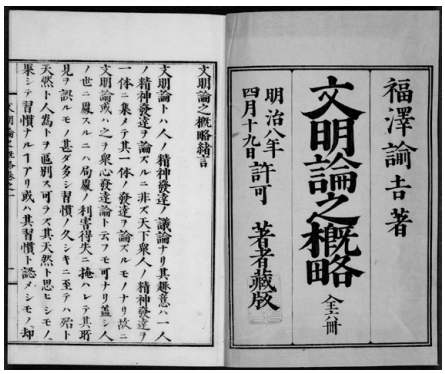


図 48

図 47

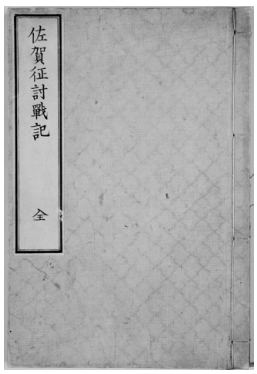


図 46